2020 年 6 月 14 日（日）「労苦の意味」

《聖書協会共同訳》コヘレト 2:18-23

18 私は、太陽の下でなされるあらゆる労苦をいとう。それは私の後を継ぐ者に引き渡されるだけだ。
19 その者が知恵ある者か愚かな者か、誰が知ろう。太陽の下で私が知恵を尽くして労したすべての労苦をその者が支配する。これもまた空である。
20 私は顧み、太陽の下でなされたすべての労苦に、心は絶望した。
21 知恵と知識と才を尽くして労苦した人が、労苦しなかった人にその受ける分を譲らなければならない。これもまた空であり、大いにつらいことである。
22 太陽の下でなされるすべての労苦と心労が、その人にとって何になるというのか。
23 彼の一生は痛み、その務めは悩みである。夜も心は休まることがない。これもまた空である。

《新改訳 2017》伝道者の書 2:18-23

18 私は、日の下で骨折った一切の労苦を憎んだ。跡を継ぐ者のために、それを残さなければならないからである。
19 その者が知恵のある者か愚か者か、だれが知るだろうか。しかも、私が日の下で骨折り、知恵を使って行ったすべての労苦を、その者が支配するようになるのだ。これもまた空しい。
20 私は、日の下で骨折った一切の労苦を見回して、絶望した。
21 なぜなら、どんなに人が知恵と知識と才能をもって労苦しても、何の労苦もしなかった者に、自分が受けた分を譲らなければならないからだ。これもまた空しく、大いに悪しきことだ。
22 実に、日の下で骨折った一切の労苦と思い煩いは、人にとって何なのだろう。
23 その一生の間、その営みには悲痛と苛立ちがあり、その心は夜も休まらない。これもまた空しい。

【序論】

今日は「労働」という事柄について考えてまいります。「働くことに意味はあるのか」という根本的な問いがコヘレトから投げかけられています。コヘレトの労働観は、ただ「空しい」と言うだけに止まらず、「労苦を憎む」（18 節）、「絶望した」（20 節）とまで言い切るほど、彼は労働に対するマイナスイメージに辿り着いたのです。

さて、この箇所は賛否両論があってもおかしくはないはずです。働くことが大好きな人もいるのですから。仕事に生き甲斐を見出し、喜びと充実感に溢れている人は決して少なくありません。労働に対する物の見方には個人差があると思われます。一例として、

作曲家フェリックス・メンデルスゾーンは、類い稀な才能に恵まれ、まさに太陽のように輝く一生を送ったと言われます。幼少の頃から文豪ゲーテが出入りするサロンで、その場で渡されるどんなに厄介な楽譜も初見で弾きこなしたといいますし、バッハのマタイ受難曲を掘り起こしてその価値を世に認めさせ、自身の作曲においては新古典主義の立場に立脚し数多くの名曲を残しました。彼は若干 38 歳で亡くなりましたが、その才能ゆえに苦労知らずの一生だったと言われます。その点で、同じく才能に恵まれてはいたけれども、多くの苦悩を負っていたモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパン、シューマンのような人々とはイメージが違います。

世の中には様々な分野で大成する人がいて、後世に偉大な遺産を残しているという事実があります。こういった事実を全く無視して今日の箇所を読むことはできないでしょう。コヘレトが読者に伝えようとしている普遍的真理を聞き取り、私たちに与えられている「労働」の意味を根本から問い直す機会になることを願います。

【本論】

本論１．労苦の実は他人に引き継がれる

> **私は、太陽の下でなされるあらゆる労苦をいとう。それは私の後を継ぐ者に引き渡されるだけだ。その者が知恵ある者か愚かな者か、誰が知ろう。太陽の下で私が知恵を尽くして労したすべての労苦をその者が支配する。これもまた空である。**（2:18-19）

今日の箇所で再び何度も登場するのが「**太陽の下**（もと）」（**日の下**（した）／新改訳 2017）という表現です（18, 19, 20, 22 節）。これは基本的に「目に見える現実世界」「神抜きに動いている人間世界」を意味するでしょう。その世界に人間は生まれ落ち、食を得るために懸命に働く。働かなくては生活に必要なものを得るためのお金を稼ぐことができないので、労働は人生の必須事項です。お金がかかる部分は、ただ食のためだけではなく、インフラ、交際、教育、医療、趣味、レジャー、保険、自動車、税金、生活必需品の購入など、多岐に亘ります。生活水準が上がるほど、「食べる」以外のこともいろいろと考えなくてはならず、そのために費やすお金がまた必要になります。商才のある人は自ら稼ぎ口を生み出し、中には莫大な収益を得ていく人もいます。

ソロモンも富を築き上げる才能に恵まれていました。彼はその一生の間に莫大な財産を手にし、そのために多くの労力を費やしました。

あくまで参考的数値に過ぎませんが、平成 29 年に厚生労働省が発表した「賃金構造基本統計調査」によると、勤続年数 40 年とした大卒男性の生涯賃金は約 1 億 9,000 万

円と言われます。現代、一人の人間が一生でかかる金額がどれくらいなのかも大よその見当がついてきますが、言い方を変えればその必要分を得られればよいということになります。しかし、贅沢を求めればそれ以上が必要になり、そのために知恵と能力、そして労力を使わなくてはならないでしょう。

コヘレトが問題にするのは、では富を得るために多くの労力を費やし、寝る時間も削って働いたとして、最終的にそのお金はどうなるのかということです。一生かけても使いきれないほどの富を得たとしても、それは自分の死とともに無関係になる。それに留まらず、残された富は必ず誰かの手に渡ってしまう。「**私の後を継ぐ者**」という表現は、21 節では「**労苦しなかった人**」と言い換えられていますが、コヘレトは基本的に「自分の息子」というよりも「どこかの馬の骨」のことを言っているようです。運良く相続者がいる場合はまだしも、財産はどこに流れていくか分からない。あるいは大半が相続税で持って行かれてしまうかもしれません。

「**その者が知恵ある者か愚かな者か、誰が知ろう**」という表現も皮肉たっぷりです。前任者がどんなに良い仕事をしても、後任がそれを壊してしまうかもしれないと。特に、能力ある父親の下で何の苦労もなく育った子どもは、身代を食いつぶしてしまうというケースが少なくありません。これは政治の世界にも多分に存在します。聖書には様々な事例がありますので、いくつか取り上げてみましょう。

本論２．旧新約に見られる事例／父と私

①レハブアム

まず筆頭に挙げるべきは、ソロモンの息子レハブアムでしょう。Ｉ列王 12 章には、彼が王になってすぐに行なったことが書かれていますが、イスラエルの民が先代ソロモンによって負わされていた「過酷な軛（恐らく重税）」（12:4）を軽くしてほしいと求めてきたとき、彼はソロモンに仕えてきた長老たちの助言を退け、一緒に育った若者たちの助言を採り、更に重い軛で苦しめました。ここには、彼が神に知恵を求めたという言及はなく、その結果として王国は分裂に至ります。ソロモンが生涯をかけて築き上げたものは、良い後任によっては受け継がれなかったのです。

②マナセ

次に挙げるのは、南ユダ王国最大の善王の一人であるヒゼキヤの息子マナセです。ヒゼキヤは先代に蔓延（はびこ）っていた偶像礼拝をことごとくやめさせ、まことのヤハウェ礼拝を取り戻しました。そして、信仰によってアッシリヤの大軍に勝利しました。しかし、この善い働きは息子に受け継がれることなく、次代のマナセは父親と正反対のことを行な

い、偶像礼拝を取り戻しました（Ⅱ歴代 33 章）。

③放蕩息子

新約聖書には、主イエスの譬話の中に典型的な事例が出てきます。有名な「放蕩息子」のストーリーでは、二人の息子のうちの片方が父親の財産を早々に受け取り、瞬く間に使い果たしてしまうという愚かな話があります。彼は最終的に父親の許に帰りますが、これは神から離れた人間の生き方を象徴的に描いています。（ルカ 15:11-32）

④財産を倉にしまいこんだ男

主イエスのもう一つの譬話の中に、豊作に乗じて先何年分もの穀物を倉に蓄えた男のストーリーがあります（ルカ 12:16-20）。彼はそれで安心して、残りの人生を遊んで暮らそうとしましたが、神は一夜にして彼の命を取り去られたという話です。ここに出てくる「**お前が用意したものは、一体誰のものになるのか**」（ルカ 12:20）という表現は、まさしく今日のコヘレトの言葉と重なります（コヘレト 2:22）。

⑤私の場合

実際、親が遺した物を上手く用いることができるかどうかという問題は、私にとっても例外ではありませんでした。私の父親は家に収まりきらないほど多くの本に囲まれて生きた人で、彼曰くほとんどの本に目を通していたそうです。生前よく言っていたのは「喜樹が牧師になったときには本には困らないゾ」ということでした。しかし、その父親が召されたとき、私が一番困ったのは、それらのおびただしい本の存在だったのです。その書棚には非常に価値のある神学書が並んでいるのを知っていました。しかし、私に与えられた能力では難解な外国語の文献を読みこなすことができず（カール・バルトの教会教義学全集など）、私の関心がまた違う方面にあるのも事実でした。そしてある日、場所的な必要に駆られて、それらの貴重な本の多くを涙ながらに寄贈または処分するに踏み切りました。変な話をしてしまいましたが、前任と後任の持っている賜物も能力も違うということを、人は弁える必要があるでしょう。

本論３．Ⅰコリント３章の労働観

> **私は顧み、太陽の下でなされたすべての労苦に、心は絶望した。知恵と知識と才を尽くして労苦した人が、労苦しなかった人にその受ける分を譲らなければならない。これもまた空であり、大いにつらいことである。太陽の下でなされるすべての労苦と心労が、その人にとって何になるというのか。彼の一生は痛み、その務めは悩みである。夜も心は休まることがない。これもまた空である。**（2:20-23）

今日の箇所に繰り返し登場する「労苦」という言葉は、原文では「עָמָל」（アーマール）

と言いますが、「骨折り」などと訳してもよいでしょう。フランシスコ会訳では「成果」という訳が採用されています。「成果」という言葉には肯定的なイメージがありますので、それが他人によって奪い取られてしまうという意味がより掴みやすくなるかもしれません。自分が一生懸命やってきたことが全部誰かのものとなるのは「大いにつらいこと」（「רַע／ラー」／「悪い」「悪しきこと」）だと言われている。

さて、この労働観もまた、一つの極端な物の見方だと言うことができるでしょう。多くの人は、そこまで深く人生を考えず、「生きていくためには働かなくてはならない」という程度のところで留まるのです。しかし、コヘレトはそこで思考を止めてしまう人ではなく、自分の死に照らして見たときの現在の労苦の意味を追求したと言えます。そして、彼の念頭にはやはり逆説的な答えがあるのです。それは、「もし神なしに生きたなら」「死後の世界がないなら」「永遠が存在しないなら」という前提の下での徹底的な検証であります。では、逆の問い方をしてみましょう。その労働が神のためであるなら？

私はここのところ、個人的なディボーションの中でＩコリント書を読んでおりまして、クリスチャンの労働観を深く教えられた箇所と出会いました。

> **私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです。植える者と水を注ぐ者は一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受けます。私たちは神の協力者、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。私は、神からいただいた恵みによって、賢い建築家のように、土台を据えました。そして、他の人がその上に建物を建てています。ただ、おのおの、どのように建てるかに注意すべきです。イエス・キリストというすでに据えられている土台のほかに、誰も他の土台を据えることはできないからです。この土台の上に、誰かが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てるなら、おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれが明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを試すからです。誰かが建てた仕事が残れば、その人は報酬を受けますが、燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐるようにして救われます。**（Ｉコリント3:6-15）

細かい釈義はさておき、パウロの教会観というのは、すべてを「神の働き」として見ること、そして働き人は各々に与えられた役割を果たしながら共に「神の家」を建て上げていく協力者であるということです。その中で、忠実に働いた人と賜物を十分に用いなかった人がいた場合、その評価を最終的になさるのは神ご自身なのです。働き人は、建設途上の「神の家」の一部を自分の代で担うのであって、次の代にそれを受け継いでもらわなくてはなりません。次の良き働き人を見出し育てることも、重要な労働の一部なのです。「神の教会」を建て上げる労働観は、世界のすべての仕事に応用することがで

き、人間社会一つひとつの営みが「神のもの」として位置づけられていくとき、働きを独占しようという性(さが)から解放されていくでしょう。コヘレトが描いているのは、言わば「欲望に支配された労働観」であり、そこから解放される道を暗に示しているのです。

【結論】

私たちが教会で奉仕をささげるところには、すべての労働を「神のもの」とするための基礎があります。そこには、人間の欲望から解放された自由があり、いつでも神に手渡すことのできる身軽さがある。そして、この労働観は地上のすべての労働にもたらしていくことができるのです。神が支配しておられる世界が「神のもの」とされていくのは、まことに自然なことではありませんか。

> **私の愛するきょうだいたち、こういうわけですから、しっかり立って、動かされることなく、いつも主の業に励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあって無駄でないことを知っているからです。**（Ⅰコリント 15:58）

【祈り】

　人に労働の責任をお与えになった天の父なる神様。アダムは楽園で生きていた時から、神のものを管理する役割を担っていました。今の世にあっても、人間には地を管理する責任が変わらず与えられていますが、それを正しく果たすことができずにいるのが現状です。もし神なしに生きたならば、人の労働には何の意味も残らないでしょう。しかし、主が与えてくださった新しい労働観によって、私たちはすべてを神への奉仕としてささげることができるようになりました。そこには、働きを独占しようという欲望からの自由があります。主の働きの一部を担い、それを後世に遺していくことができるように、私たちを励まし続けてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
創造のはじめより、人に「神のもの」を管理させる責任をお与えになった、父なる神の愛、
堕落により、労働に苦しみと空しさばかりを見出すようになった人類に、新しい労働観をもたらし給うた、主イエス・キリストの恵み、
神のために働くところに、労働の喜びと永遠性とを回復させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。